

# 書評

メヴリュト・ジャムギョズ著

『パンと小麦、そして都市——19世紀オスマン帝国の  
イスタンブルにおける食糧供給問題——』  
Mevlüt CAMGÖZ, *Ekmek, Buğday ve Şehir:  
19. Yüzyıl Osmanlı İstanbul'unda İlaşe Meselesi*  
(İstanbul: Kitabevi Yayınlar, 2017).

伊藤 瞳

現代トルコ語に「パンのお金 (ekmek parası)」という表現がある。これは、人がその日を生かすために必要な最低限度のお金を意味する。この表現は、トルコの食文化においてパンが欠かせない食材であり、それを日々購入する習慣が存在することをよく表している。こうした習慣は、オスマン帝国時代のイスタンブルにおいても同様であった。それだけに、パンの価格変動は人々にとって生活を左右する重要な関心事であった。本書『パンと小麦、そして都市——19世紀オスマン帝国のイスタンブルにおける食糧供給問題——』は、クリミア戦争(1853-1856年)が勃発し、その戦費を補うための諸外国に対する借款が財政破綻につながっていく時代を扱う。オスマン財政が危機的な状況におかれていたなか、人々の生活に必要なパンとその原料である穀物の価格変動に着目し、イスタンブルの食糧供給の構造について論じるものである。本書は、著者メヴリュト・ジャムギョズ氏が2010年にマルマラ大学に提出した修士論文と、同年6月に開催されたトルコ国内の経済史学会において発表した内容とをまとめたものである。本書は、議論の展開や史料の扱いに不十分な面も少なくない。しかしながら、後述するいくつかの特徴から、オスマン帝国の穀物供給研究に貢献する一書である。以下では、各章の内容を概観し、論評を加えたい。

まず、本書の構成は、以下の通りである。

序論

第一章 オスマン帝国の食糧供給問題

第二章 イスタンブルにおける穀物価格(1845-1880年)

第三章 イスタンブルの穀物供給地

第四章 イスタンブルにおけるパンの価格(1845-1880年)

結論

序論では、まず、オスマン帝国の社会経済史研究における物価史研究の重要性が述べられる。そのうえで、研究の対象を1845年から1880年の間に限定し、この期間

のパンと穀物の価格変化の分析を通じて、イスタンブル都市民とオスマン政府の反応を明らかにするという本書の目的が述べられる。パンと穀物の価格は、主に同時代にイスタンブルで発行されたフランス語の新聞『ジュルナル・ド・コンスタンティノープル』と、その後継紙である『ラ・テュルキ』に掲載された情報を使用している。続いて、著者は「穀物」を意味する単語の解説に紙幅を割いている。これまでの研究者たちが「穀物」を意味する単語を曖昧なまま混用してきたことに対して、著者はそれぞれの単語が持つ微妙な意味合いの違いを丁寧に解説している。

第一章では、オスマン政府が実施した19世紀初頭までの食糧供給政策の枠組みを、既存の研究を参考に概観する。まず、オスマン帝国の基本理念として「人々の豊かな生活の保障」という考えが存在し、帝国が採用した供給主義の原則がこれに従ったものであることを説明した。供給主義とは、人々が必要とする物品を可能な限り大量かつ高品質、そして低価格で提供することを目的とする経済政策の一柱である。そのうえで、食糧供給政策の具体的な内容を価格統制と供給過程の統制に分けて説明する。価格統制については、オスマン帝国の貨幣制度の説明を交えつつ、供給主義に基づき実施された価格監査の方法と公定価格制度が価格安定に果たした役割が述べられる。一方、供給過程の統制については、イスタンブルの人口や政治的变化に伴う管理方法の変遷と、供給の管理体制、特に重視された食肉と穀物の供給に関して具体的な管理方法が説明される。

第二章では、対象とする時代に関して、イスタンブルに輸送された穀物の価格変動と、その要因が論じられる。著者はまず、穀物価格を決定する最大の要因が需要量と供給量であることを前提としたうえで、農業構造や経済政策、人口推移、自然災害といった諸要因が価格決定に及ぼした影響の度合いを検討する。次に、1845年から1880年までの価格推移表を示し、1854-56年と1861-62年、そして1873-74年の三期にわたり穀物価格に大幅な高騰が発生したことを明らかにした。第一期はクリミア戦争の影響と、時を同じくして発生した自然災害が、第二期は1840年に市場に流通したばかりの紙幣が価値を喪失したことが、そして第三期はアナトリアで発生した自然災害がそれぞれの要因であることを論じた。

第三章では、イスタンブルへ輸送された穀物の供給地の変化を扱う。筆者は、1453年のコンスタンティノープル征服から1839年までの長期間を、三つの時代に分けて論じる。まず、征服直後から18世紀後半までを扱い、供給地が都市周辺から黒海沿岸や地中海沿岸といった多方面へと拡大する様子が説明される。次に、穀物管理局が供給を管理した1793-1839年を扱い、黒海沿岸と地中海沿岸から穀物が供給されていたこと、また、一時

期の例外を除き、両者の供給量に大きな差がなかったことを明らかにした。最後に、本書が主に対象とする1845-1880年については、穀物価格の推移を産地ごとに整理することで、時代ごとの供給地の割合を導き出した。クリミア戦争の影響を受けて地中海沿岸からの供給が増加した時期もあったが、長期的にみれば黒海沿岸からの供給量が多かった。また、こうした黒海沿岸から輸送された穀物の多くが、旧来の主要な供給地である黒海北岸から西岸にかけての地域から送られてきていたことを明らかにした。

第四章で著者は、イスタンブル内で販売されたパンの価格推移をまとめ、価格高騰に対する政府の対応を以下のように論じる。パンの価格についても、三度の価格高騰が生じた。まず、最初の価格高騰は1854年に発生した。この原因として、自然災害による食糧不足が生じた地域と軍への穀物輸送のためにイスタンブルへの割当量が減少したことや、やみ市の増加、また、クリミア戦争中に軍がイスタンブルに一時的に駐留したため一時的な都市の人口増加を引き起こしたことが挙げられている。これに対して政府は、イスタンブルへの供給量を減少させないように輸出を禁止し、パンの製造を自由化して生産量を確保し、さらに不当利益者の取り締まりを実施した。次に1861年に生じたパン価格の高騰は、穀物価格と同じく、紙幣の価値損失が原因で生じたものであった。これに対し、政府は積極的に金融取引に関与するとともに、閉店したパン屋への再開店支援や、強制的なパンの価格引き下げを行った。最後に1878-1879年に発生した価格高騰もまた、二度目の紙幣の価値喪失が引き金となっていた。これに対し政府は、第二期と同様に貨幣価値の操作やパンの価格の強制的な引き下げを行った。加えて、強制的な価格引き下げに伴い発生する本来の価格との差額は国庫からパン屋に支払われることを決定した。以上の点から、著者は、国庫の負担が大きいかかわらず、オスマン政府が人々の生活の安定を望む政策を展開したことを強調している。

終章では、対象期間全体の穀物とパンの価格動向を振り返り、総合的な評価をしたうえで、本書の議論をまとめている。そのなかで、著者は価格上昇という危機的状況における政府の対応を、国庫の損失をも顧みない伝統的な供給主義の原則に則った対応であると結論付けている。加えて、19世紀においても供給地もまた伝統的な地域がイスタンブルの市場に流通する穀物の大部分を占めていたことを再確認して本文をとじている。

近年、オスマン帝国の穀物供給に関する研究蓄積は増しつつあるものの、注目される時代はいまだ限られており、本書が扱った19世紀もまた、開拓中の時代といえる。本書は、研究対象期間の設定が単に研究史の穴を埋めたというだけでなく、それ以前の時代を扱う先行研究

と比較し、イスタンブルの穀物供給について1453年のコンスタンティノープル征服直後から19世紀に至るまでの連続性を示した点で評価に値する。特に、著者が従来の研究の流れを汲み、穀物の供給地と政府の対応という二つの視点を本書に取り入れたことは、旧来の穀物供給の構造との比較を容易なものにし、時代的な連続性を理解する一助となった。

また、従来の穀物供給研究は中央政府内で作成された史料を分析することが多く、そのために制度面以外への踏み込みに乏しいという限界を有していた。これに対し、本書は、穀物とパンの価格を通じて価格変動を引き起こした社会的背景と価格変動後の政府の対応、そしてその結果に至るまでの一連の動向を明らかにした点で特徴的である。著者は、価格をめぐる社会全体の動向を、戦争の影響による消極的な雰囲気蔓延する都市社会と人々の安定した生活の保障に努める政府という構図でとらえている。これは、供給主義の原則の根本的な理念自体が、19世紀にいたるまで受け継がれていたことを示している。

ただし、こうした連続性を示すにあたっては、18世紀末以降の黒海交易の構造的変化との関係性について考察が加えられるべきだっただろう。オスマン政府は、18世紀にクルム・ハン国を含む黒海北岸の大幅な領土を喪失し、ロシアをはじめとするヨーロッパ諸国の黒海交易への参入を認めた。これ以降、黒海北岸地域の役割は、イスタンブルの穀倉地帯からロシアのヨーロッパ向け穀物の生産地域へと変化したと考えられてきた。本書が示す穀物供給の構造、とりわけ伝統的な供給地の連続性は、あたかもこうした従来の理解を覆したかのようにみえる。しかしながら、第三章で明らかにしているように、穀物管理局が供給を管理していた時代の供給地の割合は、前後の時代とは異なる様相を示している。それゆえに、著者が主張するような穀物供給の構造の連続性は、18世紀末の変革の時代にどのような過程を経て、19世紀にまで引き継がれたのかという点を検討する必要があるだろう。

とはいえ、穀物供給の根本的構造が18世紀末の政治的变化を経てもなお、19世紀まで引き継がれていたことを明示したことはそれだけで意義を有している。また、本書は、従来の穀物供給研究の方法を引き継ぎつつも、より多角的な視点でこの問題を扱い、今後の研究に新たな可能性を示した。こうした点から、イスタンブルの穀物供給研究においては有益な一書に数えられるだろう。

#### 付記

本稿は松下幸之助記念財団「松下幸之助国際スカラシップ」の助成による研究成果の一部である。ここに記して謝意を示したい。